

SEA TRIAL

PROUD OF FINLAND

SARGO 31 EXPLORER

フィンランドボートの雄「SARGO(サルゴ)」を産み出す「SARINS BOATS」、
プロフェッショナルユースのワークボートを造り上げてきたビルダーだからこそできる質実剛健なエディション。
「^{エキスプローラー}冒険者」の名を冠された「SARGO 31 Explorer」を、大阪湾西宮沖で試した。

text: Atsushi Nomura photo: Makoto Yamada
special thanks: OKAZAKI YACHTS <http://okazaki.yachts.co.jp>





31フィートというサイズを感じさせない、より小型のボートを走らせているかのような錯覚に陥る高い操作性 それでいて重厚なまでの走行フィールと、高い居住性に、北欧フィンランドのプライドを感じる

近年日本でも、北欧・バルト海エリアのパワーボートが人気だ。どことなくクラシカルな風貌の、フロントウィンドウが立ち上がったデザインの小ローラーテイストのボートを良く見かける。たとえば休日に東京湾を流していても、出会うのは1隻や2隻ではない。中でもフィンランドの雄「SARGO (サルゴ)」の躍進は著しく、毎年コンスタントに輸入されており、最も目にする機会が多いように思う。

「SARINS BOATS」(Sarins Båtar Oy Ab)については、これまでも何回か取り上げてきたが簡単におさらいしておこう。SARINS BOATS はフィンランドの名門ヨットビルダー「SWAN」の船大工だった創業者の Edy

Sarin が、1967年にバルト海最北ボスニア湾に面する Kokkola という街で立ち上げた。以来 Sarin 家が代々経営している。元々フィンランド国内向けにカスタムボートやワークボートを、プレジャーユースのプロダクション艇では「MINOR (ミノア)」を造り続けてきた。20世紀末業からは「MINOR」を国外へ積極的に展開し、ドイツをはじめ欧州各国で大ヒット、日本でもお馴染みのフィンランドボートの代名詞となった。2014年には「MINOR」を「SARGO」というブランドネームに改め、さらに積極的な海外展開を推し進めている。

現在の「SARGO」はインボード仕様を廃し、すべてインアウト仕様。レ

ンジは25～36フィート。今回試乗したのは31フィートモデルの「Explorer (エクスプローラー) 」エディションだ。その特徴は「^{エクスプローラー}冒険者」を彷彿させる質実剛健な風貌と洗めのカラーリング、インテリアもエクステリアに合わせたイメージで造られている。フィンランドボートの中でも「SARGO」はモダンで明るいイメージのあるブランドだが、そこに荒々しさと力強さを加味したシリーズが「Explorer」である。

*

新西宮ヨットハーバーの棧橋に舳われた「SARGO 31 Explorer」。光の角度によってはモスグリーンやブルーグレーにも見えるチャコールグレー (Antracite Grey) のハル。それだけでは軍用艇かワークボートのようにも見えてしまうが、ウォーターラインやブルワークトップのホワイトが映えて非常にスタイリッシュ。プレ

ジャーボートのテイストを残しつつ、ハードユースを想像させる実に鮮やかな印象だ。

レイアウトはセンターキャビンのウォークアラウンドタイプ。パウデックにかけて多少の傾斜はあるが、段差がないため揺れる海上でもスムーズに行き来が可能だ。また全周をめぐるレールはマブラックの極太 (φ35mm) 仕様で、身体をホールした時の安心感は抜群。しかもデッキ面からの高さからため安全面でも優れている。



トランサムゲートも同じ太さのマットブラックで括られている。デッキは全面フレキシテック (Flexiteck) でトラディショナルな雰囲気にとり。アフトコックピットの右舷側にはアフトステーシも備わる。アフトコックピットの下部がエンジンルームとなり、今回の試



シート・ソファ類はアルカンテラで仕上げられた贅沢なもの。非常に美しく、肌触りの良い質感も落ち着きを与えてくれる。全開できるハードトップは走行時には爽快な風を送り込む。シートおよびテーブルアレンジの豊富さも「SARGO」に代表されるフィンランドボートの魅力だ。

艇はVOLVO PENTA D6-370 DPを1基搭載。しかも2基掛け可能なスペースのため非常に広い。なおエンジンバリエーションはシングルであれば基本D6(330~400馬力)、ツインの場合はD4(225 or 300馬力)×2基となる。

インテリアも、エクステリアに合わせてアレンジされている。たとえば室内の木部は、スタンダード仕様の「SARGO 31」ではチークが用いられているが、「Explorer」の場合はウォールナットが採用されている。アルカンテラを用いたシート・ソファ類も落ち着いた色合い。パウキャビン、アンダー

キャビンの2ベッドルームは、どちらも明るく非常に快適だ。センターキャビンは両サイドにドアが設けられ、ルーフのハードトップは手で開閉。さらにキャビン後部のウィンドウは跳ね上げ式で全開できる。全開にすればまるでオープンポートのようなさわやかさ、高緯度帯の短い夏を思いきり堪能するためのアイデアは「SARGO」に共通するフィロソフィといえる。

西宮沖はほとんど風もなくフラットな海面。シングルエンジンらしい高い操作性で、31フィートというサイズを感じさせず、より小型のボートを



パウキャビンとアンダーキャビンは、明るめのファブリックが特徴的。31フィート艇としては十分すぎるほどの広さが確保され、居住性も高い。シャワールーム兼用の個室ヘッドはパウキャビンの脇に設けられている。



走らせているかのような錯覚に陥る。それでいて重厚なまでの走行フィール。トラディショナルなスタイルながら、フィンランドボートの例に漏れず、非常に素晴らしい走行性能を見せる。シェイクダウン直後だったため、あまり長時間のテストは行わなかったが、今回のシートリアルではマックス33ノットを叩き出した。実際、クルージングスピードでも25ノット程度は出るため、速度性能としては十分すぎるだろう。メーカー発表値では370馬力仕様で33~35ktとなっており、ほぼスペック通りの性能を発揮し



高さのある35mm径のレールに囲われたデッキは走行中も居心地の良いスペース。アフトステーションも備わり使い勝手が良い。フリーボードが高いため、樓梯との行き来は大型スイングプラットフォームから楽だ。

素晴らしい走行フィールを見せる「SARGO 31 Explorer」。VOLVO PENTA D6-370 DPを搭載した広々としたエンジンルームは日常的なメンテナンス性も高い。シングルなら330~400馬力、ツインの場合は225馬力が300馬×2基、エンジンチョイスが豊富なことも魅力だ。



た。ちなみにツインの300馬力の場合、マックス40~42ノットとされ、パフォーマンスの高さも「SARGO」ならではの。

スタンダードモデルの「SARGO 31」の明るく華やかな雰囲気とは、一味も二味も違う「Explorer」エディション。ヘビーデューティーなプロフェッショナルユースを想像させる容姿は、マリーナでも一際目を引く。そしてその見かけを裏切らない素晴らしいパフォーマンス。ヨーロッパで高い人気を誇る「SARGO Explorer」の実力を垣間見た。PB.

SARGO 31 Explorer

- 全長 9.96 m
- 全幅 3.30 m
- 喫水 1.05 m
- 重量 5.10 ton
- エンジン VOLVO PENTA D6-370 DP
- 最高出力 370 HP
- 燃料タンク 500 L
- 清水タンク 120 L
- 問い合わせ先 オカザキヨット
- TEL: 西宮 0798-32-0202 横浜 045-770-0502
- http://okazaki.yachts.co.jp



YouTube